

ブジュン村薬草報告

徳島大学薬学部

村上光太郎教授報告

ネパール／ブジュンには多くの有用な薬草があり、それらを出荷できる体制にすれば、多くの外貨を得ることができる。その為には、村人たちが、市場に出回っている、生薬の形態についての学習をする必要がある。ただ闇雲に植物を採集しても、市場に出回っている形態に仕上げなければ、市場での取引にはならない。

換金生薬のうちで、第一番にあげられる有益な生薬としては、*Paris polyphylla* があげられる。この植物は、現地（ブジュン村）では、SATUWA と呼ばれている生薬で、漢名は七葉一枝花とよばれ、鎮咳薬として、皮膚病や毒蛇の咬傷に用いられている生薬原料である。また、運動や打撲などによる急性外傷には粉末や抽出液を噴霧または塗布することで、痛みを止め傷腫を解消できるもので、さらに、外用や内服で腰痛や肩こりなども解消できる非常に有用な生薬です。現在はブジュンの山野に多数点在していますが、効果が良い生薬である為、採集による枯渇が心配されるので、この *Paeis polyphylla* の栽培が必要と思う。

次に上げられる生薬は *Panax sp.* や *Coptis sp.* や *Magunolia sp.* で、現地名 SATGUA や KUDKI や LINGUR であろう。SATGUA は朝鮮人参代用として汎用されている生薬である。KUDKI は黄連として汎用されている生薬である。LINGUR は辛夷として汎用されている大切な生薬である。いずれも、採集、加工することで、市場性は開けている。SATGUA や KUDKI も栽培が必要になるであろう。

新薬原料として面白いのは、*Trichosanthes allichiana* であろう。これは、現地名は INDRANI で、この果肉の抗菌性は今後の研究では、新薬原料となる可能性を潜めている。

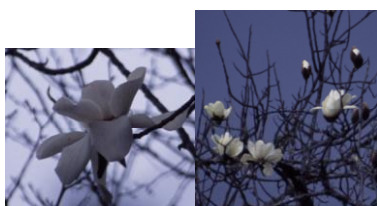
これらに次いで注目されるのは現地名 AMARA と言われる物で、正式には SUKEKO AMALA と言われる果実である。この果実を食べて、水を飲むと、水が甘くなるという、いわゆる、味覚をかえる果実であり、今後の研究によっては、その利用が増大すると思われる。特に、カロリーのない物質、例えば水などに甘味を添加できるので、新たなダイエット素材の開発に一翼を担ってくれる物と思われます。

薬用ではないが、非常の面白い物としては、現地名 PAJURE のアスパラガスの

仲間と KHANE CHTRO のオオバメギの仲間であろう。アスパラガスの仲間の方は、伸びた新芽を採集すれば、市場にあるアスパラガスの新芽の2～4倍の太さがあり、しかも柔らかいので、消費者に喜んでもらえるであろう。オオバメギの仲間の方は、酸味と甘味を持つ果汁として、美味しい飲料に加工できる。現地の水の衛生状態を改善できれば、果樹飲料としての輸出の可能性が見える。そのほか、PIPLA と言われている胡椒がある。この物は、山野で採集し、インド経由で、ブジュンコショウとして輸出されている。しかし、現地での栽培例が見られなかった。ブジュンの胡椒は香りよく、市場では好まれている物であるから積極的な栽培が望まれる。



Paris polyphylla (SATUWA)



Magunolia sp.(LINGUR)



Trichosanthes allichiana (INDRANI)



Phyllanthus embica (SUKEKO AMALA)



アスパラガス sp. (PAJURE)



オオバメギ sp. (KHANE CHITRO)

